

政治イデオロギーとしてのエコロジズム

—理想と現実のバランスの中で—

山口 裕司

(目次)

- 1 はじめに
- 2 エコロジズム
 - (1) 起源と伝統
 - (2) マキシマリズムとミニマリズム
 - (3) 緑の社会と政治
- 3 エンバイロメンタリズム
 - (1) エコ急進派
 - (2) エコ穏健派
 - (3) エコ急進主義の分類
 - (4) エコ急進主義の欠点
- 4 ドイツ「緑の党」のイデオロギー的潮流
- 5 おわりに

1 はじめに

東西の冷戦構造が崩壊して、東西のイデオロギー対立も完全に消滅したかにみえる。社会主義かそれとも資本主義かといった図式からすれば、後者の勝利に終わった。しかし、イデオロギー的対立ないし競合が、今後すべて姿を消すことがあるだろうか。そうはならないだろう。ニーチェの1世紀ほど前の言葉「神は死んだ」が象徴しているように、20世紀は価値観の多様化が非常に進み、唯一絶対の価値が存在しなくなった世紀だといえる。ネガティブに言えば「ニヒリズムの時代」だった。そのような中で、政治的には2大イデオロギー対立の時代となった。一方では社会主義か資本主義か、他方では全体主義か自由主義か、といった図式が可能だった。そして、現在ではそれぞれ後者が世界的に趨勢を占めている。しかし、資本主義も自由主義も万能ではない。それぞれ欠点をもつ。したがって、こうしたイデオロギーに対して、その欠陥をつくイデオロギーが登場する可能性がある。そのひとつがエコロジズム (Ecologism) ではなかろうか¹⁾。

最近、イートウェルとライトが編集した『現代政治イデオロギー』²⁾において、政治イデオロギーのひとつとしてエコロジズムが取り上げられている。これと並ぶイデオロギーには、次のものがある。すなわち、自由主義、保守主義、社会民主主義 (民主社会主義)、マルクス主義 (共産主義)、アナキズム、ナショナリズム、ファシズム、フェミニズム、である。エコロジズムやフェミニズムは、1970年代から80年代にかけて登場してきた新しいイデオロギーである。これに対応する形で、自由主義などの旧来のイデオロギーの復活も見られた。そして90年代初期、共産主義は崩壊した。

ダブソンは、同書のなかで「エコロジズム」を担当している³⁾。彼はそのなかで、既存の政治イデオロギー (例えば、保守主義、自由主義、社会主義) に対抗して、エコロジズムが登場してきたという。彼の見解によれば、これはエンバイロメンタリズム (Environmentalism) とも違う。後者は、既存のイデオロギーに匹敵する存在ではないとされる。しかし、現在ダブソンのような分類をしている学者は少ない。たいていは、環境主義

(エンバイロメンタリズム)がエコロジズムの意味を含めて使用されている。

ここで、そうした使用例をみてみよう。「環境主義 (Environmentalism) は、60年代から70年代にかけて、政治的関心として西欧政治に燦然と登場した。以来、環境主義運動は、安定した政治勢力の確立に向かって発展を遂げたが、環境主義は依然として異端者と見なされがちである。環境主義は、広義には、経済成長を『生活の質』の向上よりも下位に置く政治的スタンス、である。実際、環境主義者は、公害の統制によって経済的生産性が低下しようとも、同統制に賛成する傾向にあり、一般的には、新しい採掘産業の開発、原子力、大規模産業の拡大に反対した。環境主義者の価値観からすれば、社会を管理するための体系的な政策にはほとんど関心がないが、彼らの主たる関心と論理的にはではなく心理的に結びつく政策は、支持される場合が多い。したがって、産業民主主義、私的道德に関する法的緩和、徹底した平和主義といった政策は、肝心かなめのエコロジー的保護促進と結びつく(緑の社会主義など)。環境主義は、最も白熱した局面では、経済成長に反対の経済的・テクノロジー的政策となったり、また地球資源の枯渇への恐怖を通じて、もっと単純でしかも物質的豊かさを抑えた社会経済的システムに傾倒するようになる」⁴⁾。この定義においては、エコロジズムとエンバイロメンタリズムの区別は見られない。ダブソンのいえば、後者の定義に前者の内容が含まれている。

さて、本稿の目的はダブソンの見解を見据えつつ、エコロジー問題を解決する上でのイデオロギー的支柱を検討することにある。そこには大きく理想主義と現実主義の2つの柱がある。これら2つを中心にして様々な要素の析出ができる。例えば、そこに急進派と穏健派をみることが出来る。したがって、従来のエコロジー思考の多面性を概観することも可能となる。以下、ダブソンの見解、ルイスの見解、そしてそうしたイデオロギーの現実的展開であるドイツの緑の党の場合、をそれぞれ紹介しよう。最後に、以上を筆者なりにまとめた。

2 エコロジズム

(1) 起源と伝統

政治イデオロギーとしてのエコロジズムは、どのような歴史をたどってきたのだろうか。エコロジズムの歴史は現在論争的となっており、そこには3つの見解が見られる⁵⁾。

第1の見解によれば、エコロジズムの起源は、現代のエコロジー運動が支持するやり方で考え行動する時空にある。この解釈では、およそ1万年前まで地球を徘徊していた狩猟民族は、彼らの環境を搾取しない方法で共存し、同環境から自分たちの生存に必要な物資をとっていた。彼らの考え方は、自然は人間に役立つから価値があるというより自然それ自体に価値がある、というものだった。これらの理由から、旧石器時代の人間は現代の環境意識に近く、それゆえ彼らは初期の政治的エコロジストに数えられることもある。次に、18～19世紀の欧州のロマン主義者は、社会と自然界の関係改善を要求することによって、急激な工業化のもたらす悪影響に対応した。ロマン主義詩人は、自然界を道徳的価値の源泉として描き、工業化により破壊された人間と自然の調和を強調した。そうした「自然へ還れ」的思考が、現代の緑のイデオロギーの一部であるのは明らかである。同様に、手工業志向の思想家ウィリアム・モリスは、自然界への美学的関心から、工業生活における実利主義や醜悪さを打ち消すために、自然との親和を提唱し都市生活に対する田舎生活の優位を強調した。こうした考えは、現代エコロジズムに部分的に反映されている。合衆国では19世紀に現代性のある論争があった。すなわち、一方でジョン・ミューアは野生のプリザベーション (Preservation) は野生のためだと主張したが、一方でギフォード・ピンショーは、天然資源のコンサベーション (Conservation) はそれらの利用価値のためだと主張した。プリザベシヨニスト対コンサベシヨニストとして知られるこの両陣営間の論争は今日的意義をもっている。このように、エコロジズムの歴史には起源的奥行きがあるのが分かり、そして現代の政治イデオロギーとしてのエコロジズムには古い歴史があるのが分かる。

第2の見解によれば、エコロジズムの歴史は19世紀の科学者とともに始まる。当時の科学者は、マルサスの有名な主張、すなわち人口は幾何級数的に増加するが食糧生産は算術級数的にしか増加しないので飢餓が拡大する、という主張を信用しはじめた。フランス、イギリス、合衆国、ロシア、ドイツでの生物学や地球科学の研究によって、資源やエネルギーの枯渇の可能性が認識され、地理学者の中には地球を有機体とみる者も登場した。そしてOED (英語事典) は、1873年に、ドイツの動物学者エルンスト・ヘッケルが「エコロジー」という

言葉を初めて使用したことを認めた。現代科学者の見解は、今日のエコロジー運動に大きな役割を果たしているので、19世紀の科学者をエコロジズムの歴史に寄与しているとみるのも妥当である。一方で、こうした科学の見解は、自然の生活様式は最善の生活様式だという意味で、人類の行動に対して規範的意味を持つと考えられた。20世紀の最初の30年～40年間、こうした主張を展開したのは、今日の有力な左翼的政治エコロジストが賛同しようとしなない人たちだった。例えば、アンナ・ブラムウェルが「柔らかなもうひとつの右翼」といったロマン主義的ナショナリストや保守的田園帰還主義者である。また悪いことに、ドイツのナチズムは、歓喜と道徳的導きの源泉として自然への没頭を奨励した。ナチスの地方化政策は、今日の緑の党の宣言に近いように思われる。同様に、ヒトラーは肉食主義者であり、有機農園の実験がダッハウ強制収容所で実施された。実際、ナチスの生物的有機的メタファーの利用、人間状況の神秘的側面の強調、個人の利益を共同体の利益の下位に置く願望、これら全部は、政治的エコロジーの著作に反響している。この第2の見解のメリットは、エコロジズムに対する科学の重要性を強調していること、自然観の多様性と複雑性を指摘し現代的運動の政治的矛盾の可能性を警告していること、である。しかし、これら2つの見解に存在する問題は、現代的運動が本格化する状況を見逃している点である。第1の見解は、エコロジズムの現代的性格を過小評価している。すなわち、エコロジズムを産業革命とその悪影響に対する対応とみなす。第2の見解は、現代的環境問題のグローバルな性格の重要性を見逃し、政治を過小評価し科学を過大評価している。先進諸国の環境の関心が80年代後半に頂点に達したのは、2つのことが明らかになったからである。すなわち、オゾン層が消滅しつつあること、グローバルな温暖化が現実になっていること、である。エコロジー運動がその規模と重要性を増したのは、人間活動の規模が拡大しそれを吸収する生物圏の能力に限界が見えはじめた時だった。こうした主張はエコロジズムにとって重要であり、つい最近まで説得力がなかった。

第3の見解は、エコロジズムの歴史的特殊性を強調する。すなわち、環境の被害は有史以来存在したが、人類が招いた被害は、最近になってグローバルな生命維持装置の完全性と複雑性を脅かすまでになった。このような状況なしに、エコロジズムは、政治的経済的変革のための存在たりえなかった。この現代的局面で、エコロジー運動は、グローバルな意味をもつイデオロギーによって推進されて、グローバルな運動になった。同時に、社会主義政党の役割への幻滅、共産主義の終息、あらゆる政党への忠誠レベルの低下、それに対応する選挙民の不安定の増加（選挙民の多くは、政治的スペクトルのあらゆる部分から集合し、彼らの忠誠の対象を緑の党に移す用意があった）、1968年5月の学生運動、80年代初期の平和運動、同運動の環境政治との連携、これらすべては緑の党が躍進できるような状況を創ってくれた。同時に、欧米では、戦争経験のない世代によって生み出されたとの見解がある。そうした世代は、福祉国家的な社会保障の充実した豊かな社会で暮らしている。同世代は、基本的欲求が満たされた世代であり、物質的欲求の充足を越えたもっと高い順位の価値を追求する立場にある。この世代が現代エコロジズムの台頭を招来したとは結論づけられないが、脱物質主義イデオロギーが脱物質主義世代に出会って、同イデオロギーが鮮明になったといえよう。第3の見解では、エコロジズムの起源は60年代か70年代に位置づけられ、その当時の「産業主義」が問題視された。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』の特徴は、エコロジー的関係の脆弱性を強調すること、エコロジー的関係の内部に人間を設定すること、科学的進歩という伝統的考えを問題視すること、であった。これらのテーマはすべて、現代エコロジー運動にとって重要であり、カーソンの書物はしばしば同運動の到来を告げるものとして使われる。その後、ローマクラブの『成長の限界』報告は、次のように結論づけて支持をえた。すなわち、限りあるシステムのなかの限りない成長は達成不可能な幻想であるということ。これは、エコロジー政策を最も活性化させた見解である。同じく72年に、『生き残りのための青写真』によって、変革をもとめる戦略が提案され、持続可能な社会に最もふさわしい分権化社会構造の輪郭が描かれた。以上の3文献が、エコロジー運動を招来したとか、同運動の現代的な躍進を説明できる完璧な事例だと、考えるのは間違いであろう。しかし、3つの文献はエコロジー運動の普遍的特徴を描写しており、同運動の起源を知るうえで不可欠である。

(2) マキシマリズムとミニマリズム

エコロジズムの歴史的起源に関しては、イデオロギーに接近する最善の方法をめぐる見解の不一致によって、議論が分かるともいえる。それには基本的に2つの見解がある⁶⁾。マキシマリズム (Maximalism) とミニマリズム (Minimalism) である。

政治的エコロジーに関するマキシマリズムは、エコロジズムを厳密に定義する。すなわち、政治的エコロジーと判断されるためには、厳正なテストを通過しなければならない。他方、ミニマリズムは、エコロジズムを厳正な定義から解放する。後者の定義はエコロジズムの史的起源をめぐる議論ではっきりわかる。ミニマリズムはマキシマリズムより積極的に20世紀以前にエコロジズムの起源を置く。ミニマリズムの長所は、環境運動の現実的多様性を強調し、同運動の急進派や改革派に議論の余地を与えることである。マキシマリズムは、環境運動内部の政治的立場の多様性よりも政治的エコロジー的思考の内的一貫性を強調することで、かなり誇張された統一性を与える可能性がある。しかし、マキシマリズムの長所は、緑の計画の急進主義を明らかにし、エコロジズムとその他のイデオロギーとを峻別する定義の余地を残していることである。

以上は政治的エコロジー論者による区別であるが、他方実際に環境的信念を表明している人々による定義がある。すなわち、エコロジズムとエンバイロメンタリズムとの区別。エンバイロメンタリズムと政治的エコロジストは、環境への関心では一致するものの2つの点で異なる。第1に、エンバイロメンタリストは通常は環境破壊の徴候に基づいて行動するが、政治的エコロジストは環境破壊の政治的経済的原因を扱おうとする。第2に、エンバイロメンタリストはそうした破壊は「産業主義」の是正によって改善できると考えるが、政治的エコロジストは産業主義を解体するか取り替える必要があると考える。

さて、エンバイロメンタリズムとエコロジズムの区別はあまり一般的でなく、たいてい緑の政治をエンバイロメンタリズムと全く同義に扱うだろう。その理由は主に、緑の運動の民間の顔がグリーンピースや地球の友のような国際的圧力団体であり、同団体の主な仕事は、目に見える環境悪化の徴候に関する関心を高めることだからである。そうした団体は、体制変革的イデオロギー（エコロジズム）と結びついて現実の全般的批判をおこなう気がほとんどない。

この重要な違いを理解するには、イギリスなど主要政党の「緑化」を考えてみるとよい。ほとんど主な政党は、環境政策を打ち出しており、同政策は各党の原則に全く影響を及ぼすことなく既存の宣言にうまく接ぎ木されたのである。これらは注目に値する。その意味で、主要政党には、環境悪化には既存の政治的経済的社会的慣行の中でうまく対応できる、という観念がある。換言すれば、社会主義者かつエンバイロメンタリスト、保守主義者かつエンバイロメンタリスト、自由主義者かつエンバイロメンタリスト、であることが可能だ。しかし、マキシマリズムが示唆するのは次の点である。社会主義者で政治エコロジスト、保守主義者で政治エコロジスト、自由主義者で政治エコロジストであることは、不可能であるということ。その訳は、エコロジズムが、社会主義、保守主義、自由主義の前提の大部分を問題視するからである。もちろん、エコロジズムはこれら3つのイデオロギーの特色も有するが、エコロジズムはそれらのイデオロギーとは明らかに違っている。

(3) 緑の社会と政治

政治イデオロギーとしてエコロジズムは新鮮である。したがって、同イデオロギーは旧来のイデオロギーに対して新しい議論を提起しているといつてよい。では、政治的にどのようなイデオロギーの特徴をもっているのだろうか⁷⁾。

持続可能な社会を求める緑の処方箋には基本的に分権化がある。分権化のメリットは、生物圏への衝撃を軽減することである。具体的にどのように軽減されるのだろうか。第1に、分権化によって自給自足体制が生まれることになる。それゆえ分権化は、エネルギーの浪費をもたらし、環境への負荷が分からない遠距離からの贅沢品輸入をもたらすような、輸送や貿易の大きな中央集権的ネットワークへの依存をなくす。そこに見られる理念は、地方レベルでエコロジー優先の生活をすれば、地球レベルでも必然的にエコロジー優先となる、ということ。また、生産と消費のポイントを接近させると浪費が軽減され独立独歩が促進される。第2に、政治的分権化によって意思決定の質が改善される。なぜなら、最善の決定を一番望むのは、決定の影響をものに受ける人たちだからである。緑の党はこの分権化を推進するが、その主旨は、各共同体がそれぞれの環境に最も留意していること、そして分権化に必要な政治権力の委譲があれば、各共同体は必要な手段を実行できること、である。環境汚染は遠方からもたらされる（酸性雨⁸⁾、放射能汚染など）という反論に対しては、政治的エコロジストは、こうした汚染は分権化社会には存在しえない現代の大規模な中央集権的生産技術によって引き起こされる、と主張する。

分権化の程度は緑の理論家の間で論争がある。一方には、生物地方主義者（Bioregionalist）がいる。たとえば、カークパトリック・セールのように、共同体の規模・形態・性格はその地域が養える人口によって決まると

主張する人たちがそれに該当する。生物地方主義は、国家を迂回する点でアナーキスト的伝統に酷似するが、生物地方主義の矛先は、政治的不自由の源泉としての国家ではなく、人間と地球との結びつきを無視する政治的構造に向けられる。他方には、国家（政府）も分権化を促進する役割がある、と考える人々がいる。その場合、国家は地方に権力を委譲する一方、立法や計画化の権限を保持することになる。確かに、分権化の方法に関して政治的エコロジストの間に意見の不一致はあるが、しかし彼らはみな基本的に分権化の長所を確信している。共通の認識は、意思決定がもし下位レベルでできるならそれにこしたことはない、ということ。エコロジストはまた、自然への配慮の必要性だけでなく、自然から学習する必要性を主張する。現代の左派政治エコロジストが、自然を人間活動のガイドとみているのは意外である。というのも、そうした傾向は伝統的にファシズムのような右派イデオロギーに見られたからである。このイデオロギーは、極限形態では、社会ダーウィン主義と人間特殊動物説を結合させ、適者生存をモットーとするむき出しの競争を正当化する。さらに適者生存が自然であり自然は素晴らしいということになる。

緑の人々（緑の党）は、人間にもっと「自然に」ふるまうことを要求し、人間は自然の支配者ではなく生物界の一員であることを認識させる。これにより、人間の性格と自然の性格がいっそう密接に結びつけられる。これに関連して、緑の人々の間で、人類と自然界の関係の考え方がまったく分かれる。しかし、人間同士の関係に関する限り、緑の人々は、社会ダーウィン主義者とはまったく違う自然観を展開する。彼らは右翼的思考に陥ることなく自然を教師として利用する。彼らの自然観はエコロジー的自然観といえる。

緑の人々は、エコロジー的関係は中央集権的でもヒエラルヒー的でもないと主張し、人類もそうであってはならないという。これは分権化論議とも関連し、また平等化論議とも関連する。平等を求める根拠は、生態学の基本カテゴリーである相互依存概念にある。政治エコロジストの主張は、相互依存関係によって、人間同士の平等関係、人間と環境の平等関係が築かれたということである。エコロジズムを左右軸の左方に動かしたのは、平等を求める論議である。

また注目すべき問題としては、事実の描写とそれを踏まえた処方箋に関する問題がある。通説は、事実描写には処方箋に必要な結論は含まれないということである。換言すれば、たとえエコロジー的関係がヒエラルヒー的でない（事実描写）としても、その結果、人間関係もまたそうであるべき（処方箋）とは必ずしもいえない。政治エコロジストの間でこれに関するコンセンサスは見られないが、機能するイデオロギーとしてのエコロジズムのレベルでは、エコロジー的「事実描写」は政治的「処方箋」を意味している。これとの関連で、自然への配慮は「エコ・フェミニズム」へとつながる場合がある。自然と女性は、歴史的にみて双方とも搾取されてきたのであり、両者の解放が望まれるという主張である（この論点は後述する）。

持続可能な緑の社会に必要なのは、生物圏に対する人間の衝撃を軽減することであった。そこに見られる考えは、中長期的な人間の生き残りが危うくなり生物圏自体の完全性と複雑性が危うくなる段階に、人間活動が達したということである。政治エコロジストに従えば、創造物の頂点から人間を離して生物圏内の他の仲間と同じ低い位置に置くことによって、エコロジスト的政治・経済・社会が構築される必要がある。

3 エンバイロメンタリズム

次に、ダブソン流のエコロジズムを内包するエンバイロメンタリズム（環境主義）概念について考えてみたい。この概念を整理する上で、非常に参考になるのはルイスの見解である。彼の分類における「エコ急進派」（アルカディア環境主義者）はダブソンの（政治的）エコロジストに近く、「エコ穏健派」（プロメテウス環境主義者）はエンバイロメンタリストに近い。

（1）エコ急進派

この立場の主要な前提は、人間社会は現在のままでは持続不可能であり全く別の社会経済的論理に基づいて再編成されなければならない、というものである。持続可能な社会は規模が小さくテクノロジーが適度でなければならない、とする。それゆえ、エコ急進派は、それ自体に破壊性のある社会を素朴に改革しながら温存しようとする考え方を厳しく批判する⁹⁾。

さて、急進的な環境主義の主流派は4つの基本的命題を有している。①原始人はどうすれば人間が自然と(また人間と)調和して生きられるかを体現している。②分権化の実施や地方の自給自足はエコロジー的社会的健全化に必要である。③テクノロジーの進歩は本来有害であり人間性を否定する(科学の進歩はそうではない)。④資本主義市場システムは破壊性と浪費性を回避できない。これらの見解を支えている信念は、経済成長は持続不可能であり有限な地球の資源的制約を無視している、である。しかし、主な環境団体は妥協しすぎる嫌いがあり「忍び寄るコンサベーションイズム」の罠にはまってしまう⁹⁾。既存のロビー活動組織の穏健な姿勢は、地球規模の環境破壊を懸念している人々にはかなり頼りなく見える。こうした限界を乗り越えるべく、環境団体のグリーンピースは、プラグマティズムと妥協に反対する草の根革命を要求した。急進派の多くは、組織的環境保護団体を敵とみるか、単に便宜的な仲間とだけみなしている。

他方、急進的環境主義は、田園の素朴な生活様式を求めるアルカディアンともいえる。この理想的田園は、オルタナティブな社会のロマン主義的想像力を長く培ってきたが、今日、アルカディアの歴史的運命に気づいている者はほとんどいない。詩人はアルカディアの田園生活を賞賛したが、純朴なアルカディア人はスパルタの侵略者によって脅かされた。紀元前370年、テーベの将軍エパミノンドスがアルカディア南部の村人たちを新しいポリスに統合し、さらなるスパルタの侵略に対抗して障壁を造った。皮肉にも、メガロポリスという名を初めてもらったのはこのアルカディア市だった。それにもかかわらず、アルカディアという名前は決してなくならなかった。とくに、ルソー以降、現実には不満を抱く知識人が、アルカディアに憧れてそれを田園のシンボルと見た。しかし、アルカディアの現実と理想はかけ離れていた。アルカディア神話は、消毒された自然像に依拠しそこから労働や苦悩は便宜的に排除された¹⁰⁾。ルイスは、それゆえ、もし現実的な環境運動を展開しようとするれば、別の古典的理想型(プロメテウス)の立場に依拠しなければならない、という¹¹⁾。

(2) エコ穏健派

この立場は、プラグマティズム哲学を重視し大組織の運動を活性化させるのはこの哲学だとみる。有力な環境保護団体のリーダーは、資本主義を受け入れ経済成長に賛成する。健全なる環境は持続可能な開発に依拠している。すなわち、それは人間的豊かさや幸福を求めるエコロジー的に健全な経済計画に依拠している。持続可能な開発を支持する者が強調するのは、環境保護と持続的経済成長を相互に両立しようものを見なすこと、換言すれば両者が必ずしも対立する目標ではないと見なすこと、である。また環境優先政策を追求する場合、穏健な手法を要求するのも、エコ穏健派である¹²⁾。

こうした立場は、非常に創造的で時として非常に破壊的な人類の向上の道筋を包含している。人類の未来はテクノロジーを廃棄することにあるのではなく、テクノロジーを新しい環境的構想に調和させることにある。人類はプロメテウスの炎を燃やし続けるべきだし、またそうするだろう。しかし、人類は放火狂の青年としてではなく責任ある成人としてそうすることを学ぶべきだ。こうした環境主義は「進歩」を次の2つの理由で評価する。ひとつは進歩が人間社会に約束したもののため、もうひとつは人間の強奪した自然に進歩が還付しそうな恩恵のため、である。この見解は、テクノロジー的進歩を望ましいとも思い自然の再生を必要だとも思う¹³⁾。

以上より、エコ急進派を「アルカディア環境主義」、エコ穏健派を「プロメテウス環境主義」の立場とみることができる。この両者の考え方の違いを示したのが、表1である。

(表1)アルカディア環境主義とプロメテウス環境主義の比較

表1・1 全般的方向づけ

アルカディア環境主義	プロメテウス環境主義
ユートピアの政治	可能性の政治
非妥協的基準	妥協と和解の受け入れ
定常的経済均衡	効率性増大に基づく経済成長

アルカディア環境主義	プロメテウス環境主義
社会の抜本的再編成	持続的改革
自然内部での人類の再浸礼	自然と人類の結合緩和
哲学的理想主義	理想主義と物質主義の中間的立場
破壊的脱近代主義ないし汎神論的合理主義	穏健な脱近代主義
逆オリエンタリズム(諸悪の根源としての西洋)	コスモポリタニズム(西洋特別主義の否定)
アメリカ民主主義をごまかしと見る	アメリカ民主主義を不完全だが現実的と見る
生物中心的平等主義	全生物に固有の価値あり-全種の平等主義は排除
環境的決定論(規範的)	環境的可能主義

表1・2 人類学的・生態学的位置

アルカディア環境主義	プロメテウス環境主義
社会的エデニズム(原始人はみな完全な社会的調和を享受したという信念)	善悪は全人間社会の特性
環境的エデニズム(原始人は完全な環境的調和を享受したという信念)	環境破壊的傾向は全社会の潜在的特性
生態学的均衡の優位	生態学的変遷の優位
自然の全体論的理解	総合的・還元的調査方法ともに最重要
原始的自然が存在するのは現代人が破壊しない所	事実上あらゆる風景は根本的に人類の影響を受ける
人間の自然管理は傲慢かつ破壊的	人間の自然管理は生物多様性保存のために必要
参加意識は原始人共通の特徴；分析意識は現代人共通の特徴	精神的普遍性-文化的多様性によって緩和
原始人はまったく裕福	部族人はしばしば貧乏
人間社会組織は生態学的類推を通じて理解可能	人間社会組織には社会的説明が必要

表1・3 人間的努力規模の解釈

アルカディア環境主義	プロメテウス環境主義
小さいものは美しい・大きいものは醜い	小さいものは時には醜い・大きいものは時には美しい
都市生活に反対	都市生活に賛成
低密度定住に賛成	高密度定住に賛成
経済的・政治的自給自足	経済的・政治的統合
生物地方主義	政治的・生態的統合
「グローバルに考えよ：ローカルに行動せよ」	「多様な空間規模で考え行動せよ」
ユートピア的分権化と全体主義的集権化の間に中間的立場はない	調和した分権化と柔軟な集権化の望ましさ

アルカディア環境主義	プロメテウス環境主義
コミュニケーション・テクノロジーは監視と抑圧を強化する 現在の傾向はグローバルな文化的均一化の増大	コミュニケーション・テクノロジーは自由を強化する 現在の傾向はグローバルな文化的交配と多様性の持続化

表1・4 テクノロジー観

アルカディア環境主義	プロメテウス環境主義
手工業生産に賛成 死滅した有機体から創造された自然的産物に賛成 口頭および通常印刷によるコミュニケーション 簡単な陽光収集器とバイオマスからのエネルギー アマン派型の農業 テクノロジーの進歩は本質的に破壊的 科学は人間を自然から遠ざける力 近代工業の排除による有毒廃棄物の排除	柔軟なオートメ化に賛成 不活性物質から創造された人工的産物に賛成 高度な遠距離通信によるコミュニケーション 高度な陽光収集器からのエネルギー 完全な害虫管理；温室栽培；代用食料品；遺伝子工学 テクノロジーの進歩は危険だが潜在的には救済的 科学は環境的救済に必要 テクノロジーの改善と規制の強化による有毒廃棄物の排除

表1・5 経済的位置

アルカディア環境主義	プロメテウス環境主義
物々交換経済 第一世界の生活水準低下 強制投資の必要性 失業はオートメ化に起因 協力に賛成、競争に反対 資本主義は本来自然と社会に致命的 資本主義は改革が不可能な一元的現象 資本主義は必然的に短期集中型 資本主義は(まもなく)自己破壊するシステム 資本主義は必然的に集中化を増大させる傾向がある	統制資本主義 世界全域の生活水準改善 投資増大の必要性 失業は生産性遅滞に起因 競争的協力に賛成 資本主義は潜在的に破壊的かつ救済的 資本主義は真の改革が可能な多元的現象 資本主義は長期的展望下で最善の機能を果たすシステム 資本主義は適応能力が抜群 資本主義は遠心的求心的傾向の双方がある

(傍線は著者Lewisによる)

表1・6 グローバルな開発に関する展望

アルカディア環境主義	プロメテウス環境主義
第一世界の豊かさの基盤はただ第三世界の利己的利用にある	第一世界の豊かさの基盤は本質的に国内経済の原動力にある
第三世界の工業化は周到に回避すべき	第三世界の工業化は社会的公正や環境保護のために必要
開発の基盤はロウテク的・農業的主導性にあるべき	開発の基盤はロウテクとハイテク、農業と工業の主導性の組み合わせにあるべき
第三世界は経済的自給自足をめざして努力すべき	第三世界は世界経済内部への統合をめざして努力すべき—ただし有利な条件で

(出典)Lewis, *Green Delusion*, 1992, pp.253-6

(3) エコ急進主義の分類

エコ過激論者は、エコ急進派には中心的哲学がないと主張しているが、その根拠は運動のスローガンが多様であるからである。しかしその中に、5つの主要な思潮が判別できる¹⁰⁾。第1の影響力が最も大きいものは、ディープ・エコロジーの穏健版の反人間主義アナーキズム (Antihumanist Anarchism) である。第2に、原始主義 (Primitivism) といえるディープ・エコロジーの厳格版がある。原始主義者は、ディープ・エコロジストが提案した小規模の社会秩序への回帰に賛成するだけでなく、積極的な文明破壊にも賛成する。反対に、第3の人間主義エコ・アナーキズム (Humanist Eco-anarchism) は、文明のプラスの属性を保持しようとするが、これは第4の哲学であるエコ・マルクス主義 (Eco-marxism) と同じである。しかし、第3と第4の哲学は、国家ないし資本主義を人類の破壊性を培う根源とみるべきかどうかについて、意見が分かれる。これら四つの流派を横断しているのが、エコ・フェミニズム (Eco-feminism) 哲学であり、これは自然の略奪の究極的起源を、男性による女性の搾取の中に見ている。エコ・フェミニズムには多くの形態があり、そのすべてが急進的とは限らない。しかし、その中には過激版の急進的エコ・フェミニズム (Radical Eco-feminism) がある。

①反人間主義アナーキズム：生物圏平等主義 (人間と動物は平等) の立場をとる。すべて生物は固有の価値を有し人間にとって有益であろうとなかろうと固有の生存権をもつとみる。人間中心主義の哲学は傲慢であり有害でもある。自然は相互に関連する全体を形成しており (全体は部分の合計を超越する)、全体論的アプローチが正しく還元主義的アプローチは間違いだという。人間社会の分権化、人間と自然との再統合、を求める。自給自足と参加民主主義が可能な小規模の地域共同体をめざす。人間個人は地球上で生きるための物質的消費を最小化すべき。未来の国家なき人間社会の特質は、人間の平等と完全な平和主義 (人間同士の平和と人間と自然の平和) である。精神的先験的環境救済への道を擁護する。多様性と寛容を賛美する一方、西洋思想の全遺産を廃棄する。

②原始主義：最も極端なエコ急進派哲学であり、①の理念と似かよる点が多い。①との歴然たる違いは、②が暴力を放棄するのではなく賞賛する点である。彼らは自然の戦士であり、狩猟へのグローバルな回帰のために文明の破壊を求める。「洪積世への回帰」がモットーである。急進派運動を展開するためには暴力は自然であり必要である。他のディープ・エコロジストが生物圏平等主義を原則的に信奉する一方で、原始主義者はその理念を純粋に信奉する。人間を絶滅から救うことと天然痘ウイルスをそうすることとは同じレベル、とみる。現代人は地球上の梅毒であり、蛇を殺すより人間を殺す方がましだ、ともいう。人間の死滅を望むような甚だしい人間嫌いの面がある。この思想の典型的団体は「アース・ファースト！」である¹¹⁾。

③人間主義エコ・アナーキズム：アメリカのミュレー・ブッキンらの社会エコロジー学派に典型的な考え方である。参加民主主義による統治と、自然と完全に調和する分権的自立的共同体を標榜し、エコロジー的健全化と社会的平等は絶対に分離できない問題とみる。また、ディープ・エコロジーと違って、人間を他の生物の上位において人間的合理性を信奉する (社会的進歩主義)。ブッキンは原始社会の知恵を認めるが、原始的自然に回帰する願望はなく、その意味で、小規模テクノロジー的楽観主義を奉じている。ブッキンの理念は、一部に熱心な支持者をもったが、全体として急進的環境運動にはあまり影響を与えなかった。

④エコ・マルクス主義：アメリカのエコ・マルクス主義はアカデミックな運動であり、同運動は発展が非常に遅れた。マルキストの多くが最近まで主張していたのは、環境主義は現実の社会問題からブルジョアの方向転換をもたらす、ということである。今日もマルキストは、エコロジー思考を保守的と見なす傾向が強いが、異端的マルクス主義の拡大とともに、エコロジー問題がアジェンダに登場しはじめた。エコ・マルクス主義の哲学的基盤を築くためには、マルクスの経済認識を実質的に修正する必要がある。すなわち、有限な地球の限界を踏まえて、共産主義体制下ですら経済成長は無限に持続できない、という認識を深めることである。エコ・マルキストが賛成できない点は、他の急進的緑派の社会経済的要件である自給自足的分権化である。他方で、エコ急進派はマルクス主義的根幹を拒絶し続ける。たとえば、マルクス自身が人間中心主義者であり、政治的集権化と西洋帝国主義を支持し、あらゆる形態のテクノロジー的進歩を賞賛したこと、である。エコ・マルキストはまた、生物的多様性の喪失に関心がなく、生物圏平等主義を標榜する運動にあまり理解がない。エコ・マルクス主義は微々たる存在にすぎないが、マルクスの資本主義批判はすべての急進的な環境運動に強い影響を与えた。ほとんどのエコ急進派は、政治経済的理解において本質的にマルクス主義的である。

⑤エコ・フェミニズム：これは①～④の立場を横断し、その哲学は様々な陣営に入り込んでいる。共通の前提は、自然破壊は概して男性の行為でありそれは男性による女性の搾取と同レベルである、ということ。それゆえ、男性の支配の論理はあらゆる抑圧と搾取の形態の背後にある。エコ・フェミニストすべてが急進的とは限らない。リベラルなエコ・フェミニストは、資本主義と民主主義の枠内での個人の自由を強調し、定義的には穏健派に入る。しかしエコ・フェミニストには、自由主義信奉者はほとんどいない。マルクス主義的エコ・フェミニズムは、分析の中心カテゴリーとして性的抑圧と階級的搾取を使用するが、その使用は様々である。しかし、主流のフェミニズム環境主義においては、社会主義的要素は2次的であり、そうした支配的学派は「急進的エコ・フェミニズム」(以下、REF)といわれている。エコ・マルクス主義的政治が普通の意味で急進的である一方で、急進的エコ・フェミニストは、彼らのフェミニズムをマルクス主義フェミニズムよりずっと非妥協的だと述べる。では、REFはどのような考え方をもっているのだろうか。REFの基本的前提には、男女は本質において異なり両者は本来異なる考えをし異なる感じ方をする、という考えがある。最も重要なことは、女性は生来男性より自然界に近い存在と考えられていること。REFは、男性の現実認識が悪いために現在のエコロジー的社会的不幸がある、と批判する。そして、男性上位イデオロギーには3つの誤信責任がある、という。すなわち、同イデオロギーは原子的個人を賞賛すること、同イデオロギーは差別のヒエラルヒーを置くので赤裸々な支配構造を不可避的に招来すること、同イデオロギーは人間を自然から精神を物質から分離する虚偽の規範的二元論に基づいていること、である。したがって、環境的危機を回避し地球と人間の調和を保つために、個々の物体よりも個々の関係を重視する(女性的・情け深い・ヒエラルヒー的でない・二元論的でない・エコロジー的)思考様式を受け入れること、をREFは要請する。REFはまた地球的霊性と深く結びついている。すなわち、REFの多くは、かつて人間を自然と調和させていた女神崇拝を積極的に復活させている。REFはまた、その哲学の多くを柔らかいディープ・エコロジーと共有している。たとえば、両者とも、生物圏平等主義、分権化、参加民主主義、平和主義、自然との精神的合致、ハードテクノロジーすべての回避、を強調する。しかし両者には相互不信がある。エコ・フェミニストは、ディープ・エコロジーを男性の支配を継続させるための複雑な口実だと批判する。一方で、ディープ・エコロジストの批判は、エコ・フェミニズムは環境破壊の要因を唯一のもの(男性上位主義)に還元し、それによってエコロジー的思考の適用に失敗している、ということである。

ある意味で、エコロジズムは、多くの矛盾した議論を含んではいるが、「あらゆる種類のオルタナティブな理念や、あらゆる種類の人間が調和する説得力のある箱」だった、といえる⁹⁰。確かに、急進的環境主義には唯一の統一的哲学は見いだせなかったが、しかしほとんどの緑派極端主義には、次のような前提があった。原始的純粋性概念、全面的分権化命令、適切なテクノロジー運用の必要性、根本的な害悪としての資本主義観、である⁹¹。

(4) エコ急進主義の欠点

ルイスは自身を「リベラル穏健派」と位置づける。彼の立場からすれば、緑派極端主義は自然それ自体への脅威として排除されるべき、とされる。この主張は、一見矛盾しているように見えるが、ルイスは、自然の一番熱心な擁護者が知らず知らず自然の一番危険な敵対者になる論理を、次の6点に整理している⁹²。

①エコ極端主義が環境に脅威を与える一番直接的な方法は、反環境主義的反対運動を煽るということ。「アー

ス・ファースト!」のような急進的団体に環境保護運動の主導権を握られると、それまでに勝ち得た民衆の広範な支持を失ってしまう²⁰⁾。緑派極端主義が環境運動のリーダーとなると、そうしたリーダーの唱える空想的要求に民衆はますます嫌気がさしてくる。したがって、ひとにぎりのエコ急進派が人類を破滅させる契機をつくる一方で、彼らは科学を拒否しかつ信念のある行動ができない。

②さらに直接的で恐ろしいのは、現実に必要な環境的改革に反対する妖怪のような急進派である。彼らの結論は、「改革的環境主義は、短期的徴候を是正することによって、自然界と人類全体の関係に必要な再構築を先送りするので、始末が悪い」ということ²¹⁾。こうした改革はエコロジー的大変動を小手先で変えるにすぎないが、しかしこの大変動は環境優先の社会秩序の建設のために必要な前提条件である。彼らの主張には、地球を救うために地球をさらに破滅に近づける狂気が確認できる。

③そういう幻想は狂氣的極端主義者に限らない。穏健な急進派でさえ、エコロジー的に持続可能な経済の発展を妨害するイデオロギーを支持する。急進派は全面的分権化、非都市化、経済的自給自足、ハイテク技術の排除、資本主義の完全解体を希求する一方で、未来のソーラーパワーの改善を妨げるばかりか、過去の人類的進歩を破壊しようとする。ほとんどの急進的緑派は、適切なテクノロジーに賛同するが、このテクノロジーは設計的にすぐれた中世の器具にはかならない。そこから簡単な風力発電は期待できるが、ソーラー発電は期待できない。また大企業を解体して小規模企業に変えても、小企業には公害改善の技術を開発できない。

④急進的環境主義は、人口統計学の問題に責任がある。人口の減少がエコロジーの健全化に必要なであると彼らは力説するが、あらゆる徴候から判明するのは、彼らの理想とする社会計画によって人口増加がまた進むということ。小さな自給自足的な地方共同体にもどることは、歴史的に着実に人口増加をもたらした条件を再現するのみである。

⑤急進的環境主義は、人間の自然管理に執拗に反対することで地球へのもうひとつの脅威を生み出す。「自然が一番良く知っている」という考えは、すでに人類が自然界に大きく関与している段階では無意味である。昔のままの自然は存在しない。人間が自然を管理したために、自然が残っているともいえる。例えば、動物園から動物を解放することが地球を救うことになるという急進派の考えは間違いであり、そのようなことをすれば、絶滅に瀕する動物が本当に絶滅してしまうだろう。

⑥急進的緑派の運動は、地方への回帰を支持すること、複雑な母胎としての自然界の奥深く人間社会を位置づけること、によって地球に脅威を与える。現在の人類の数からすれば、そうした方策はほとんど不可能であり、仮にそれができたにしても、加速度的に自然破壊が進むのみである。産業革命以前の「調和」に回帰するには、必然的に世界人口をかなり減少させなければならない。もし人口を減らさずに自然への回帰を進めると、環境的破局を招くことになる。

4 ドイツ「緑の党」のイデオロギー的潮流

次に、政治的現実の場では、イデオロギーとしての「エコロジズム」ないし「エンバイロメンタリズム」はどのように展開されているのだろうか。ここでは、緑の党の躍進の典型例であるドイツの「緑の党」の場合を具体的に取り上げてみたい。ドイツの緑の党について、ジョン・マコーミックは「1983年3月、西欧の環境政治は新しい次元に突入した。それは西ドイツ連邦議会に、緑の党の議員が27名登場したことによる。同党の結成は4年前だったが、5%条項の壁を乗り越えて連邦議会に代表者を送った」²²⁾と指摘し、ドイツの緑の党の台頭の歴史的意義を評価している。緑の党は、ドイツ統一後議席を減らした。一方で、その形成過程をみれば明らかのように²³⁾、さまざまなイデオロギー集団が入り込んでおり、それゆえ内紛も絶えない。

では、緑の党のイデオロギー的潮流を整理してみよう²⁴⁾。ドイツの緑の党では、エコロジーと社会主義を統合しようという努力がなされた。その中に識別できるのは、4つの原則論である。まず、マルクス主義的社会主義からは、革命的戦略の「教条主義」と社会的物質的進歩の不可避性への信念が生まれ、同じくこの社会主義から、政治的実践の中心に解放と自由を置く「人間主義」が生まれる。両者とも啓蒙的政治思想に起源を持っている。次に、エコロジーからは、環境悪化の改善とその悪化の原因の除去をめざして工業生産の再構築を求める「改革主義」が生まれる。同様にそこから、エコロジー的観点で良い社会を再定義しようとする「自然主義」が生まれ

る。これら4つを組み合わせたものが、図1・1である。理論的には、こうしたエコロジー的批判から2つの対応方法が生まれる。①改革主義的人間主義（社会主義のエコロジー化）、②教条主義的自然主義（エコロジーの社会主義化）、である。①は啓蒙思想（理性による進歩と解放）の社会主義的解釈を再建しようとする。一方で、②は①のビジョンを拒絶し、近代以前の非西洋文化と非西洋宗教から引き出される思想（自然主義的完全性と自然主義的調和）に賛同する。これら4つのイデオロギー的潮流（A・B・C・D）は、80年代のドイツの緑の党に生まれた4派閥と連合戦略に対応している。これを踏まえると、図1・2のように図式化できる。「現実主義者」と「原則主義者」は、党内ではそれぞれ強大な派閥集団であり、「エコ自由主義者」と「エコ社会主義者」は、図の矢印が示すように、それぞれ現実主義者と原則主義者と連携した小派閥集団である。ここで注目したいのは、派閥横断の同盟は「目標」の問題というより「戦略」の問題に基づいている、ということである。上述の「エコロジー」と「マルクス主義的社会主義」という指標を、それぞれ「戦略」と「目標」に置き換えてマトリックスを作ってみると、図1・3のようになる。これによって、緑の党内の4派閥の分類ができる。「エコ自由主義者」は改革政策を志向し、それゆえかなり頻繁に「現実主義者」と提携する。「エコ社会主義者」は、原則的の反対派という戦略をとるために「原則主義者」と提携する。その場合、エコ社会主義者は、原則主義者が自らの知的支柱を人間主義的伝統（理性と解放）に置き、自然主義を信奉しすぎたために、ともすると原則主義者と不安定な同盟を結ぶこともあった。こうした同盟と相互作用のパターンが示唆しているのは、緑の党を今日まで絶えず苦しめてきた同党の発展阻害の構造である。原則主義者は、結局、自然主義的教条主義に基づく多数派同盟の形成ができなかった反面、エコ自由主義者、エコ社会主義者、現実主義者の間に「改革主義・人間主義連合」が長期的に成立するのを阻止した。

したがって緑の党は、イデオロギー的アイデンティティーとして社会主義とエコロジーの融合をめざしたが、その際、この若い政党には2つの危険性がつきまとった。第1の危険性は、ロマン主義的反西洋的ドイツ思想の伝統への回帰を志向する自然主義的カテゴリーと結びつく形で、急進的左翼が再建される可能性である（これはナチズムと関連する）。第2の危険性はほぼ現実化している。すなわち緑の党が政治的麻痺状態と支持率低下に陥っていることであり、こうした状態は、4つのイデオロギー的潮流にみられた対決（持続的だが決定的でない）から生まれた、といえる⁽²⁶⁾。

5 おわりに

政治イデオロギーとしてのエコロジズムに関しては、議論が始まったばかりである。したがって、本稿で安易にエコロジズム論に関する結論を下せない。しかし、ダブソン、ルイスらの見解を踏まえて、筆者なりに整理することはできる。

まず、ダブソンは、以前から「エコロジズム」と「エンバイロメンタリズム」を区別する必要性を力説している。彼に従えば、今世紀末のエコロジズムは、次のように展望できる⁽²⁶⁾。今や、エコロジズムはその理念を実行する段階にある。現実と理想にはギャップがありすぎるので、エコロジズムの実践には確かに問題が多い。緑の党や環境団体は、ライフスタイルを変化させるなどの影響をもたらしたが、産業（工業）主義は地球的規模で実践されており、実践されてない地域でも産業主義の願望はぬぐいがたい。エコロジズムの未来を展望する際に、まず必要なのは、エコロジズムをエンバイロメンタリズム（環境主義）から区別することである。環境主義は、将来、公共政策の決定において果たすべき役割が大きい。環境主義の外形は時代の環境意識とともに変化する。確かに、環境主義は常に最優先課題とは限らないだろうが、少なくとも政府は環境主義にリップサービスを行う。このサービスは結局、エコロジズムを勝利に導く。しかし、エコロジズムの将来的役割が、環境主義に委ねられたと考えるのは間違いである。なぜなら、資本主義の解体、人間中心主義の再検討、分権化社会、を求める急進的要求への対応がこれまでなかったからである。この論点に関して、エコロジズムは受け取る側で反応がまちまちである。すなわち、ある者には、エコロジズムは脱産業主義に向けての唯一の解決策であり、またある者には宿命的無関心で迎えられる。エコロジズムの未来は、現実的には、こうした両極端の反応の中間にある。そして、その未来は、世界各国の主たる方針となった感のある穏健的環境主義にとってのひとつの良心として行動することにある。最悪の環境状態を阻止すべく、90年代のエコロジズムはそうした行動的運動的役割を一手に引き受

(図1)ドイツ「緑の党」内のイデオロギー区分

図1・1

マルクス主義的社会主义

	人間主義	教条主義
エコロジ	A	C
ー	B	D

図1・2

マルクス主義的社会主义

	人間主義	教条主義
エコロジ	現実主義者	理論的には可能だが、 緑の党内では経験的に 実在せず
ー	エコ自由主義者 エコ社会主義者	原則主義者

図1・3

目 標

	自然主義	人間主義
戦	エコ自由主義者	現実主義者
略	原則主義者	エコ社会主義者

(出典)Andrei S. Markoits and Philip S. Gorski, *The German Left: Red, Green and Beyond*, 1993, pp.117-8

けるだろう。すなわち、エコロジズムは、エコロジー運動家の靈感の源泉となり、原則的でも急進的でもない環境政治のチェック機能になる。

このようにエコロジズムとエンバイロメンタリズムを区別する必要性が述べられる。通常はしかし前者の意味は後者の中に含まれている。ルイスは、既述の通り、エンバイロメンタリズムの中から「急進派」と「穏健派」を区分した。彼流に言えば、前者が「アルカディア環境主義」（理想主義）を志向し、後者が「プロメテウス環境主義」（現実主義）を志向する。ダブソンの用語法との比較では、前者がエコロジズムに、後者がエンバイロメンタリズムに、ほぼ該当するだろう。

ドイツの緑の党との関連では、基本的には、原則主義者がエコロジスト、現実主義者がエンバイロメンタリスト、にそれぞれ対応している。同党における、両者間のイデオロギー対立、権力闘争ははなはだしい⁽²⁷⁾。ダブソンは、緑の党とエコロジズムの関係を、社会民主党と社会主義の關係にたとえている。ドイツの緑の党は、それゆえ、「緑の急進主義」（エコロジズム）ではなく「緑の改革主義」（エンバイロメンタリズム）の政党であるという⁽²⁸⁾。これほど簡単に緑の党を色分けできないのは当然あるが、同党の現実主義路線からして、注目すべき指摘ではある。そして、緑の党の歴史的意義のひとつは、既存の政党を「緑化」したことだろう。たとえば、ドイツ社会民主党（SPD）は積極的に環境政策を推進し、緑の党と連立政権を組み、SPDの綱領も環境重視型に様変わりした⁽²⁹⁾。将来、緑の党が消滅することがあるにしても、同党のもつ「アルカディア環境主義」が既存政党に「プロメテウスの環境主義」として影響を及ぼしたという事実によって、エコロジー的観点から同党の評価は高まるだろう。

では、エコロジズムに対するスタンスをどのようにとればよいのだろうか。シェーファーは、環境運動の目標としては、理想主義と現実主義のバランスを強調している⁽³⁰⁾。ダブソンのように、やはり、理想としての「エコロジズム」を念頭に置きつつも、現実的には「エンバイロメンタリズム」路線をとらざるをえない、というのが、時代の趨勢なのかもしれない。しかし、両者のバランスをとりつつ環境問題を改善するにしても、そこには自ずと多様性がうまれる。どちらに力点を置くかで、環境政治や環境運動のあり方もかなり違ってくる。しかも、バランスをとるのは非常に困難だという急進派的議論も当然あるだろう。とはいっても、基本的には、理想主義と現実主義の間に進路を見つけ出さなければならない。

《注》

- (1) 山口裕司「エコロジー思想への政治学的接近—『ローマ・クラブ報告』を中心に—」『阪大法学』第40巻第2号（1990年11月）を参照。
- (2) Roger Eatwell and Anthony Wright(ed.), *Contemporary Political Ideologies*, Pinter Publishers, 1993.
- (3) なお、ダブソンの緑の政治思想に関する整理は、Andrew Dobson, *Green Political Thought: An Introduction*, Unwin Hyman, 1990. を参照されたい。
- (4) David Robertson, *A Dictionary of Modern Politics, Second Edition*, Europa Publications, 1993, p.165.
- (5) Andrew Dobson, Ecologism, in: Roger Eatwell and Anthony Wright(ed.), *op.cit.*, 1993. pp.216-9.
- (6) *ibid.*, pp.220-1. (7) *ibid.*, pp.228-32.
- (8) 酸性雨問題に関しては、山口裕司「酸性雨問題とその解決をめぐる—環境問題を考える一つの手がかり—」『阪大法学』第42巻第2・3号（1992年11月）を参照されたい。
- (9) Martin W. Lewis, *Green Delusions: An Environmentalist Critique of Radical Environmentalism*, Duke University Press, 1992, pp.2,3,5.
- (10) Peter Borrelli(ed.), *Crossroads: Environmental Priorities for the Future*, Island, 1988, p.19.
- (11) David Pepper, *The Roots of Modern Environmentalism*, Routledge, 1989, p.85.
- (12) Lewis, *op.cit.*, p.15. (13) *ibid.*, p.4. (14) *ibid.*, pp.15-6. (15) *ibid.*, pp.27-36.
- (16) Carolyn Merchant, *Radical Ecology: The Search for a Livable World*, Routledge, 1992, pp.173-6.
- (17) Anna Bramwell, *Ecology in the 20th Century: A History*, Yale University Press, 1989, pp.237,249.
- (18) Lewis, *op.cit.*, p.42. (19) *ibid.*, pp.6-8.

- (20) Trip Gabriel, "If a Tree Falls in the Forest, They Hear It." in: *New York Times Magazine*, November 4, 1990, p.64.
- (21) Roderick Nash, *The Rights of Nature: A History of Environmental Ethics*, University of Wisconsin Press, 1989, p.150.
- (22) John McCormick, *Reclaiming Paradise: The Global Environmental Movement*, Indiana University Press, 1989, p.137.
- (23) ドイツの緑の党の形成過程に関しては、山口裕司「西ドイツ『緑の党 (DIE GRÜNEN)』の形成過程—エコロジー的要素をめぐる諸問題—」『阪大法学』第39巻第2号 (1989年11月) を参照されたい。
- (24) Andrei S. Markoits and Philip S. Gorski, *The German Left: Red, Green and Beyond*, Polity Press, 1993, pp.116-8.
- (25) *ibid.*, pp.118-9. なお、原則主義者のR・バーロに関しては、山口裕司「R・バーロのエコロジー思想に関する予備的考察」『南京都学園研究紀要』第3巻第7集 (南京都学園研究センター、1992年3月) を参照されたい。
- (26) Dobson, *op.cit.*, 1993, p.235.
- (27) この論点は、次の文献に詳しい。Rudolf van Hüllen, *Ideologie und Machtkampf bei den Grünen: Untersuchung zur programmatischen und innerorganisatorischen Entwicklung einer deutschen "Bewegungspartei"*, Bouier Verlag, 1990.
- (28) Dobson, *op.cit.*, 1990, pp.2-5.
- (29) E.Gene Frankland and Donald Schoonmaker, *Between Protest and Power: The Green Party in Germany*, Westview Press, 1992, pp.175-91.
- (30) Victor B. Scheffer, *The Shaping of Environmentalism in America*, University of Washington Press, 1991, pp.197.

